【土木史研究　講演集　Vol.28　2008年】

応其上人に関する研究*

A Study on Saint Ougo

西山 孝樹**　知野 泰明***

By Takaki NISHIYAMA and Yasuaki CHINO

概要

近世の幕府治水技術流派である「紀州流」の出所である和歌山県。その北部を西流する紀の川両岸に河岸段丘が拡がる。その山間部は、近世初頭まで溜池によって耕作が行われて来た。そして、1707（宝永４）年、大畑才蔵が開削した小田井用水により紀の川北側の河岸段丘1100ha もの美田を開くことができたと伝えられる。しかし、大畑が活躍する100年余前、応其上人という僧侶が溜池を築堤し、既に新田開発を行っていた。そこで本研究では、「紀州流」の原点を見出すことを最終目的とし、応其上人による土木事業の業績、溜池築堤の技術を中心に研究を行った。結論として、「紀州流」の原点に応其上人が存在する可能性が得られた。

１．はじめに

江戸時代の治水技術は、明治以降、一つの通説が当然のように述べられてきた。それは、河川の築堤を主とする技術は、「関東流」と「紀州流」により支配されていたというものである。

「関東流」は、河川の蛇行を許し、洪水時は蛇行部に設けた乗越堤や霞堤により、溢れた水を堤の背後に設けた遊水池に滞留させるもので、江戸時代初期に伊奈氏が創始した治水技術である。「紀州流」は、「関東流」で用いられた乗越堤や霞堤、遊水池を取り除き、蛇行した河川を強固な連続堤をもって直線状にしたもので、1722(享保７）年に紀州藩から幕府に召し出された井沢弥惣兵衛為永が創始した治水技術であるとされてきた。「紀州流」は「関東流」にとって代わるもので、技術差が存在するものとして扱われてきた。「紀州流」の方がより進んだものであるというのが通説であった。

しかし、研究が進むにつれ異論が唱えられるようになった。「紀州流」は、築堤の構造、樋門、樋管などの個々の技術は進んでいることは確かであっても「関東流」と「紀州流」における河川処理の技術に相違はなく、区別されるべきではないと言われるようになった[1)]。なぜなら、連続堤は局部的に井沢が改修したもので、利根川を例にとると、全体を通して堤防の嵩上げが行われていないこと、遊水池の排除については見沼代用水開削時に沼地の干拓を行った程度で遊水機能をなくしたわけではない等が「紀州流」という枠組みで捉える点に疑問が湧いてきた点である[2)]。

「紀州流」は、利根川のような大河川の処理よりも用水路開削や湖沼の干拓等に発揮された技術と見るのが適当であり[2)]、河川の技術の主流は「関東流」で、江戸時代を通して用いられたというのが現在の考え方となっている[2)]。

そこで、本研究では原点に戻り、井沢弥惣兵衛為永（1663～1738）を代表とする「紀州流」を確立した人物が生まれた和歌山県に目を向けた。その井沢は、大畑才蔵（1642～1720）に代表される先駆者から見聞し、自らの努力を持って技術者として大成していったと思われる。大畑は、紀州・勢州・越前等に於いて、新田開発・道路改修・河川改修・用水路開削等々、農村や漁村の生産活動の基礎を築いた人物である。大畑が用水路開削に於いて測量で用いた水準器、サイホン・掛樋といった技術を井沢が参考にしたと考えられる。

彼等が活躍する100年余前、土木事業に尽力し、和歌山県北部に多大な功績を残した人物に応其上人（1537～1608）がいた。応其に関するこれまでの研究は、人物史、全体の業績についてはまとめられている。また、溜池の築堤、橋の架橋等は、業績の一つとして書かれている。しかし、土木事業に焦点を当てた研究は、ほとんど行われていないのが現状である。

そこで、本論文では、応其上人について把握し、各地に残した業績をまとめた。また、橋本市周辺の土木事業に焦点を当てて考察し、最後に、応其にとって最大の溜池築堤となった引の池についても研究し、「紀州流」への

*keyword：応其上人、紀州流、大畑才蔵、井沢為永
**学生会員　日本大学大学院工学研究科土木工学専攻
***正会員　博(学)　日本大学工学部土木工学科　准教授
（〒963-8642　福島県郡山市田村町徳定字中河原1）

関連性を考察した。

2．応其上人について

図－1　応其寺境内の応其上人像（撮影：筆者、2007）

（1）応其上人の略歴

応其上人は、1537（天文6）年、近江国の領主・佐々木承禎の家臣である佐々木義秀の子として生まれた。1573（天正元）年、37歳の時に高野山に登り、宝性院政遍により得度（出家）し、応其と改めた[3)4)5)]。その後13年に渡り、日々奥之院に参拝し、苦行に励んだ。また、五穀を口にせず木の実等を食べて修行に励んでいたことから木食上人とも呼ばれるようになった。1585（天正13）年、豊臣秀吉の高野攻めで和平交渉を買って出て、破滅寸前で高野山を救った。また、土木事業に関して卓越した才能を持って橋本市周辺の田園1400ha を潤したとも伝わる[6)]。

1598（慶長3）年、豊臣秀吉が他界してから情勢が変わり、応其にとっても転機となった。応其と秀吉の関係については2（2）で後述するが、1600（慶長5）年には関が原の戦いで豊臣氏と徳川氏の地位が逆転した。そのため、応其は1601（慶長6）年、高野山を下り近江国飯道山に隠棲し、1608（慶長13）年10月1日73歳の時に飯道寺で没した[7)8)]。**表－1**に、応其上人の紀州内を中心とした略歴を示した。

表－1　応其上人の年譜

年号	西暦	内容
天文6年	1537年	近江国蒲生郡の領主・佐々木承禎の家臣、佐々木義秀の子として生まれる。
天正元年	1573年	高野山に登り出家し、後に応其となる
天正13年	1585年	豊臣秀吉の高野攻めを破滅寸前で救う 秀吉の命で高野山金堂、奥の院御廟の再建の監護を応其上人にさせる
天正15年	1587年	古佐田村の崇福寺を再興し、応其寺と名づける 紀の川に橋（長さ130間　約236m）をかける 橋は、3年後に流失
天正18年	1590年	平谷池、岩倉池、引の池を竣工する 高野山で興山寺の建設をする
文禄2年	1594年	青巌寺が落慶する
文禄3年	1595年	橋本市で塩市を開く
文禄4年	1596年	豊臣秀次が青巌寺で切腹する
慶長3年	1598年	豊臣秀吉の死去
慶長6年	1601年	高野山を下り、近江国の飯道寺にこもる
慶長13年	1608年	飯道寺で死去

（2）応其上人と豊臣秀吉の関係

応其と秀吉の関係は、秀吉の高野攻めが企画された1585（天正13）年に始まる。秀吉は、新井新助を高野山に送り、降伏を迫った[9)]。秀吉に逆らった根来寺（和歌山県岩出市）が焼き払われた経緯があった[10)11)]。そこで、高野山側は、敵対することはせず、無条件で降伏する旨を伝えるため、交渉に応其・南院宥全・遍照尊院の三名を秀吉の陣中に送り込んだ[12)13)14)]。その応其は、客僧（高野山外からの修行僧）であるにもかかわらず、身を挺して高野の危機を救おうとした。秀吉は、その人柄に惚れ込んだと伝えられ、高野攻めは中止され、焼打ちを免れた。秀吉が後に、「高野の応其上人と思われるな。上人の高野と思われよ」と述べていることから相当な信頼を受けていることがわかる[15)16)]。

応其が高野山を救った直後、秀吉は一旦寺領を没収するが、その後2万1000石の寺領を与え、高野の保持と再興を認めた[17)18)]。また、橋本を開き、1587（天正15）年に塩市を開くにあたり、秀吉から「永代諸役免許」[19)]を受け、橋本における塩市の独占と税の免除を受けている所にも秀吉と応其の信頼関係が垣間見える。これをきっかけとして橋本は和歌山県内の一経済圏の中心地として発展していく。

1595（文禄3）年3月3日、豊臣秀吉は、母天瑞院殿の3回忌供養を営むため、高野山へ登山し、供奉は徳川家康や前田利家らであった[20)]。3月5日には、連歌の会を開いている。応其自身、歌に秀でており「無言抄」という連歌集を出しているほどである[21)]。高野攻めによる交渉以前から旧知の間柄であったと書かれた文献があるが、応其と秀吉は、和平の交渉を交え、応其と秀吉の双方が連歌師・紹巴を介して連歌の会を開き、歌を詠むことで、互いの厚い信頼関係を構築していったものと考えられる[22)]。紹巴（1525（大永5）年～1602（慶長7）年）は、戦国時代の連歌師であり、この3回忌供養にも参加している。しかし、1585（天正13）年に秀吉と交渉を持って以来、約15年に渡り知遇を受けてきた応其にとって、秀吉の死は、不遇の第一歩であり、関が原の戦いを経て、学僧との関係も険悪になってきたため、高野山を下りざるを得ない状況となる。

（3）応其上人による業績

ここでは、応其が関わった京都及び高野山内における建造物の再建や建立についてまとめる。建設開始及び落慶年度がわかっているものについて**表－2**にまとめた。秀吉の命を受け、応其が監護した寺社は、高野山内25ヶ所、京都では80ヶ所余であるといわれる[23)24)]。京都方広寺以外の寺社は、高野山内の業績である。

剃髪寺は、1593（文禄2）年に豊臣秀吉が亡き母（大政所）を弔うため建立され、大政所の剃髪を仏前に納めたことから名が付き、後に青巌寺と改められた。興山寺は、行人客僧の学寮にあてられたものである。現在、跡地には金剛峰寺の奥殿と別殿が建てられている。1869（明治2）年に青巌寺と興山寺が合併され、現在の総本山金剛峰寺となった。金堂は、幾度となく焼失しており、現在の建物は、1934（昭和9）年に再建されたものである。

表－２　応其上人の業績一覧[25)26)27)]

建立開始年月日			落慶年月日			寺院名
年号	西暦	月　日	年号	西暦	月　日	
天正13年	1585	7月16日	天正15年	1586	9月7日	高野山 金堂再建
天正13年	1585	9月27日	天正14年	1586	4月21日	奥の院(高野山)御廟の造営
天正14年	1585	12月	不明			京都方広寺の大仏殿建立の監護
天正15年	1586	不明	不明			奥の院に石塔の建立
天正18年	1590	6月19日	天正18年	1590	9月28日	高野山 興山寺創建
不明			文禄2年	1593	7月22日	高野山 剃髪寺(青巌寺)
文禄3年	1594	7月26日	文禄4年	1595	9月8日	高野山 大塔表柱の補修

（４）紀北　橋本周辺の土木事業

応其による土木事業は、和歌山県橋本市を中心として紀の川周辺に集中しており、特に溜池の築堤が主である。

高野口町誌、橋本市史を中心に土木事業の一覧を**表－３**にまとめた。引の池、岩倉池、平谷池、畑谷池の４池については池の傍らに五輪塔、記念碑が建てられており、応其の関与が明確である。しかし、それ以外については、当時の文献が残っていない。そのため、応其が関与した土木事業は、地域の伝承に頼る部分が多く、今後の課題である。**図－２**には、橋本市内の主要な溜池を示した。図中の応其が関与した以外の溜池は、それ以前のものといわれているものもある。**表－３**にまとめた応其の業績について、併せて図中に示した。

1591（天正19）年、秀吉は高野山寺領を再び与えた。復活させた寺領2万1000石の内1000石は応其の知行となった。応其が受けた寺領の場所は不明であるが、自ら、池の築堤を行った土地から寺領をもらった可能性がある。

1587（天正15）年、応其寺を建立し、高野山への橋を架け、橋本が発展したのは確かである。なぜ、この地に寺を建立する必要があったのだろうか。当時の応其は、同時に京都、橋本市周辺及び高野山に現場を持ち、指揮・監督していた。

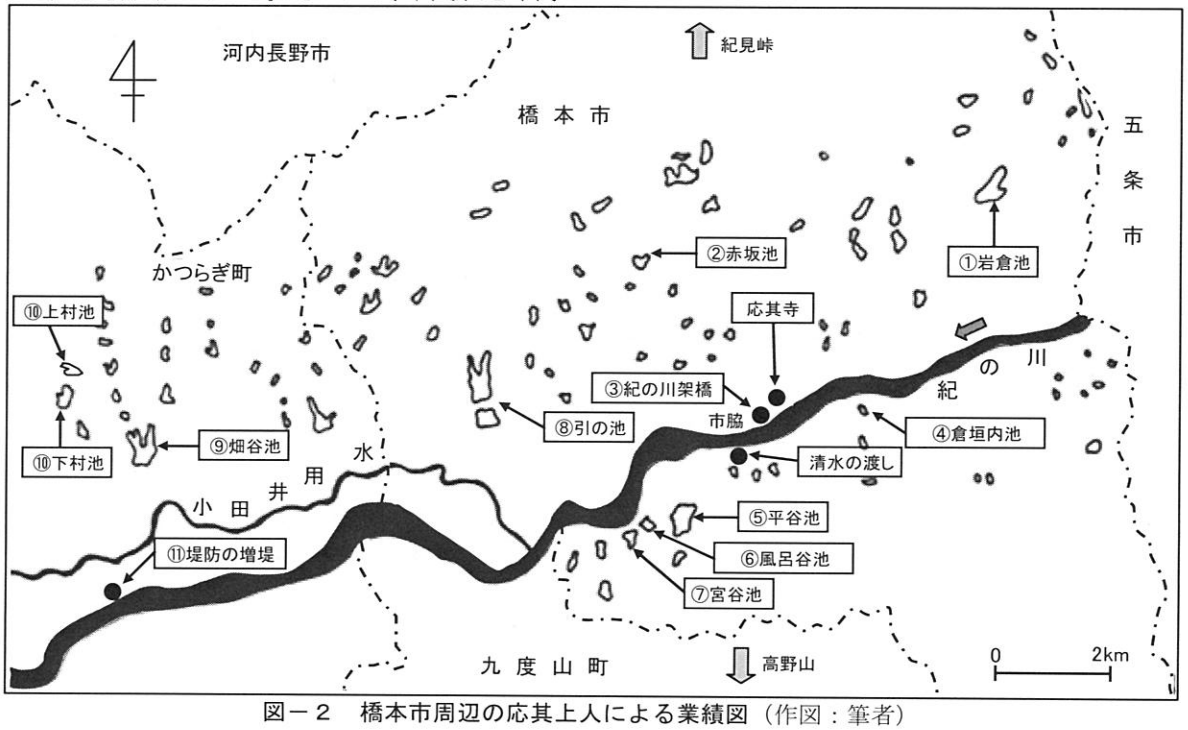
各現場を往来するのは容易ではなく、当時の高野山に通ずる登山道も難路であった。そのため、高野山と中間止宿の寺としての役割を果たす為であったと推定される[29)]。また、1590（天正18）年には、引の池、岩倉池、平谷池の３池がほぼ同時期に完成している。応其寺が落慶した1587（天正15）年頃には、完成年月不明な風呂谷池等を含め、溜池の多くが建設されたものと考えられる。

従来、高野山へは紀見峠より市脇に至り「清水の渡し」により紀の川を越え、高野山へ登っていた。しかし、川が増水した際は、「清水の渡し」では度々不便があった。そこで、1587（天正15）年に応其が紀の川に架橋するに至ったものである。その理由は、二点考えられる。

一点目は、紀の川に架橋をしたのは、高野山への参詣を容易にする目的があったと考えられる。二点目は、私見であるが紀の川を挟み、両岸で溜池の築堤を行っていることから、応其寺と溜池の往復の都合を考えての事であったのであろう。悪天候時に足止めされるのを防ぎ、点在する各現場を効率よく回るためであると考えられる。また、橋は、130間（約236m）[30)]もの長さであったという。高野口町誌に代表される応其に関する文献の多くは、前者の高野山への参詣を容易にするためであると書かれている。しかし、この項で述べたように応其の当時の状況を考えると後者の理由が最も大きいものと考えられる。

表－３　応其上人による橋本市周辺の土木事業

名称	所在地	竣工年	
		年号	西暦
①岩倉池	和歌山県橋本市隅田町	天正18年	1590
②赤坂池	和歌山県橋本市菖蒲谷	不明	
③紀の川架橋	和歌山県橋本市橋本	天正15年	1587
④倉垣内池	和歌山県橋本市向副	不明	
⑤平谷池	和歌山県橋本市南馬場	天正18年	1590
⑥風呂谷池	和歌山県橋本市南馬場	不明	
⑦宮谷池	和歌山県橋本市南馬場	不明	
⑧引の池	和歌山県橋本市高野口町応其	天正18年	1590
⑨畑谷池	和歌山県伊都郡かつらぎ町妙寺	天正17年	1589
⑩下村池・上村池	和歌山県伊都郡かつらぎ町市原	不明	
⑪紀の川堤防の増築	和歌山県伊都郡かつらぎ町三谷	不明	



図－２　橋本市周辺の応其上人による業績図（作図：筆者）

3．引の池

引の池は、応其の関与した土木事業の中で最大規模の構造物である。また、他の溜池と比べ、五輪塔といった史料も現存しており、かつ、唯一、応其の技術面について触れられている文献「引の池と應其上人と應其村との関係」[18]など、参考史料が豊富である。

（1）築堤当時の普請について

現在の引の池は、上池と下池からなる。上池は、応其上人の手によって築堤されたものである。下池の築堤年は不明であるが、徳川宗直が第六代藩主として就任した1716（正徳６）年～1757（宝暦７）年の時代のものと伝わる。上池の面積は90,615㎡、下池の面積は23,418㎡である。

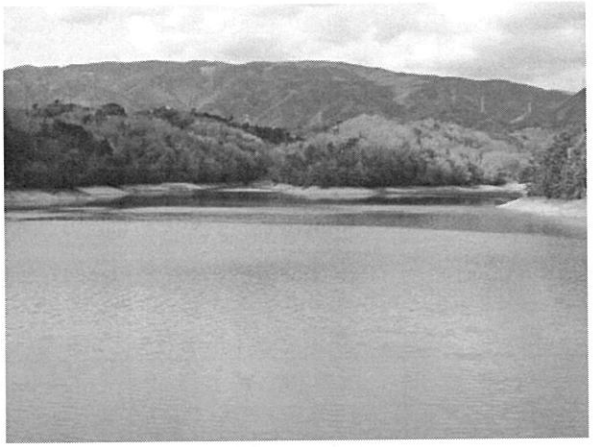


図-3　引の池（上池）（撮影：筆者、2007）

「引の池と應其上人と應其村との関係」に引の池について詳細が書かれている。以下、その内容をまとめ、当時の普請について迫りたい。

① 引の池の測量[35]

他の部分は人任せでも良いが基礎は、自ら造らなければならないと応其は思い、自家の紋所のある紅白の旗を竹竿に高く翻し、人夫を率い、縄を張り回して測量を行った。計画通り雨天樋を西にとっていたが不便であることがわかり途中で東側に変更した。

② 土取場[36]

測量はできたとしても池を築くために最も重要なことは土質の選択で、足場の良い所の土を選んではいけないとして、長く南に突き出た中尾山辺りから土を運搬した。

③ 張り芝の収集[37]

堤の張り芝の収集は、相当必要である。そのため、一ヶ所で必要な芝を得るのは不可能である。また、切り取り運搬すると人夫と費用がかかる。そこで、監督者が明日の必要分量を指定し、夕方帰る人夫に命じ切り取ってくるよう話をした。張り芝は、各方面より集まったものであるといえる。

④ 岩の切り取り[38]

雨天樋尻等に用いる岩は福塚辺りから切り取り、恋野あたりの谷から少しは船によって運んだ。

⑤ 人夫の集まり寄ってきた地方[38]

応其の村人は言うに及ばず遠近より集まってきた者が相当多い。最も遠方は奈良県五条市二見で、引の池から約12km離れている。記録によると、

神野々、岸上、野、市脇、東家、橋本、清水（僅少）、馬場（僅少）、丹生郷、滋尊院、端場、名倉、大野、田原、吉原

僅かながら集まったのは阪部、二見の人も交じっていた。

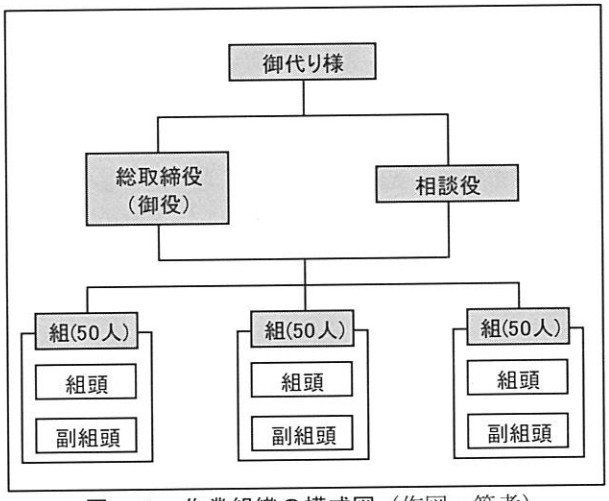
⑥ 石積み石工人夫[39]

誰にでもできる仕事ではなく優秀な技巧者が必要で清水村の馬場と今の丁田（その頃の清水）、神野々、浄土寺信太村の西川、遠くは柏木（加世田村、現 かつらぎ町笠田、約８km遠方）より召し集めたという。

⑦ 樋用の松材[40]

池の東側の山と引の谷の瀬戸より伐り出し挽き割り、木挽の職人は細川、富貴、大滝、猿川より集めた。

⑧ 作業組織[41]



図－４　作業組織の模式図（作図：筆者）
（参考文献18）pp. 72-73の文章を図で表した）

図－４のように、50人を一組として組には必ず組頭、副組頭を置き、その上に総取締役（当時は御役）と相談役がおり、その上に応其の代理の役人として工事の最高権威者として御代り様が存在していた。御代り様とは、引の池の五輪塔に彫られている奉行に当たると思われる。

その奉行であった西山勝家については、３（２）で後述する。

⑨ 堤の固め方[42]

応其がこれに最も努力したと伝えられている。松の丸太に竹の柄を付けた槌というもので幾何十もの組が歌に調和して槌の上げ下ろしを一斉に規律正しく作業して西端より東端に、東端より西端に漸進して堤土を打ち固める。槌で締めた跡は女子や子供を督して草鞋を履いて踏み固めたという。

また、人夫の疲労を防ぎ作業の効率向上対策として歌の堪能な者を組々に配置し、歌にあわせて槌の上げ下ろしをし、堤土の踏固めをした。少量の土を締め固めるときには老幼男女に草鞋を持って固めさせた。

⑩ 上人尾[43]

引の池の西側の山中の雨天樋の真向かいに突き出た山の尾がある。築堤のときに応其がここに来て工事監督した遺跡があった。大正の初期頃、ここに碑を建立したが、便が悪く、1914（大正３）年の増堤の際、西に移した。

（２）引の池の実質的な監督者であった奉行 西山勝家[44]

1590（天正18）年、応其は橋本市周辺で引の池、岩倉池、平谷池の３池を同年中に完成させ、京都では方広寺大仏殿の監護、高野山に於いては興山寺の建設と多忙を極め、各地を東奔西走していたと考えられる。応其が一つの現場に留まり、指揮・監督をしていたとは考えにくい。つまり、各々の現場には、技術を持った現場監督者が存在していたものと思われる。

引の池の傍らに建てられた五輪塔に目を向けると、地輪東側には「奉行　西山勝家」と読み取ることができる。その西山勝家とは、どのような人物であったのだろうか。

図－５　引の池の五輪塔（撮影、活字化：筆者）

西山家は、源為朝（鎮西八郎為朝）を遠祖とし、１代目は、鎮西蔵人左衛門佐満隆で為朝の子である。引の池の奉行である西山与三衛門勝家は、26代目に当たる[45][46]。その勝家の業績について高野口町誌を参考にまとめると、1577（天正５）年に大野弁財天の正遷宮を実施し、屋根を瓦葺から檜皮葺に改めている[47]。

1585（天正13）年、秀吉が京への路銀として官省符荘へ棟別銭を課した際に、賦課額に相違があり、西山勝家らは高野山に登り、応其上人らと交渉し解決したことである[48][49]。

その後、1590（天正18）年に竣工する引の池での奉行を勤める。農民を統率して、当時のビッグプロジェクトを成し遂げる人物と見込まれたからではないだろうか。

（３）引の池改修

史料によりわかっているもので、引の池の改修は大きく分けて三度行われていることがわかる。

まず一度目は、大畑才蔵によるものである。「才蔵日記」によると、「引野池」の記述が二度登場する。1707（宝永４）年と1711（正徳元）年である。

正徳元年に関して、樋の取替えをし、樋抜きに立合ったものであろうか。以下に、原文を載せる。

1707（宝永４）年

「一　四日　御同人　　同　かふろ
　是ハ中いふり引野池二日　丁ノ町新田渡し共
　小以　廿日　十二月一日から廿日迄」[50]

1711（正徳元）年

「十二月六日夕より七日朝迄
　一　一日　村上理右衛門殿　　市場村　三右ヱ門
　　是ハ引野池之水通し参候」[51]

二度目の改修[52]は、1914（大正３）年に当時の応其村村長吉川包丸が工費7000円を投じ、高さ1.36m の増築工事を行った。堤上の幅は、2.41m である。普通であれば、より厚みを必要とするが、内側はコンクリートを施したので水圧に耐えることができる。

三度目[53]は、1931～1933（昭和６～８）年時の村長宮本亀太郎が43000円の村費を戸投じて田原川からの導水路を完成させた。竣工式は、昭和８年３月19日応其小学校で行われた。隧道の長さは、364m で径900mm のヒューム管を敷設した。

（４）引の池周辺の溜池

引の池は、応其上人、また奉行・西山勝家によって築堤されたことが五輪塔によってわかった。

小田井用水より以北は、溜池による灌漑が行われている。**図－６**には、引の池周辺に点在する主要な溜池を示した。各池の歴史については、高野口町誌[54]を用いてまとめた。

①皿池…大野の東北部、東谷川の上流にあり、面積約2.2ha

②玉池…皿池よりも東谷川の上流に位置し、面積約1ha

喜八郎池（玉池）[55]…玉池の上流にあったと言われ、西山家30代目西山喜八郎勝房が1749（寛延２）年、正月16日から同22日まで世話やき奉行藤太夫ほか10名、村人甚右衛門以下83名、下世話やき武兵衛以下３名、若者300余人を督して築いたものである。天保の頃、埋没と共に櫨の木を植え池の面影はなくなったという。

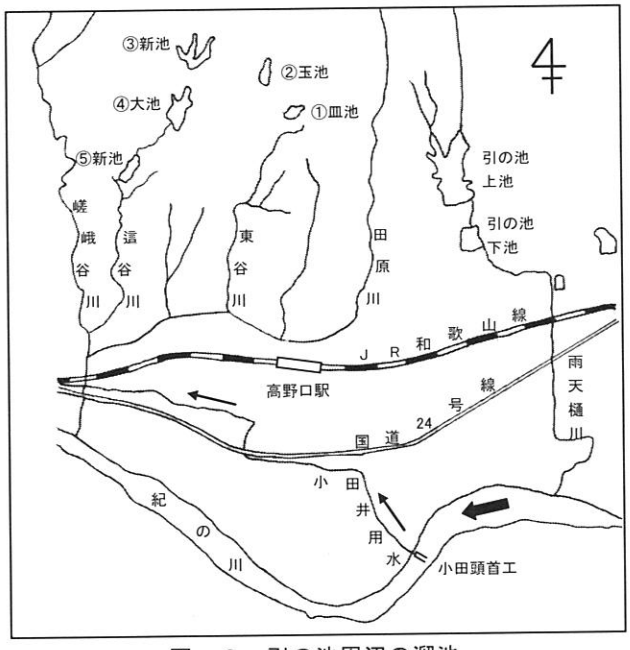
この二池から東谷川となり、大野の東部約20ha を灌漑している。

③新池…大池の北にあり、面積1.2ha で下中を灌漑して

いる。この池は、もと平山新池と重太池の二池で、重太池は元禄年間に赤井重太の築いたものといわれ、其の墓碑は今も平山見付にある。受益面積は、6.0ha

④大池…大野西谷奥にあり、面積は0.9ha ある。この池は、大きくなく的場甚右ヱ門が改修して大きくした。この池と新池の間に中池があったが大正12年に大池が決潰し、埋没した

⑤新池…1880～1881（明治13～14）年に築造されたもので面積0.5ha である。大池④と新池⑤で、受益面積は18ha



図－６　引の池周辺の溜池

このように、大畑才蔵による小田井用水開削以降も溜池が築造されていることがわかる。

（５）引の池保存への懸念

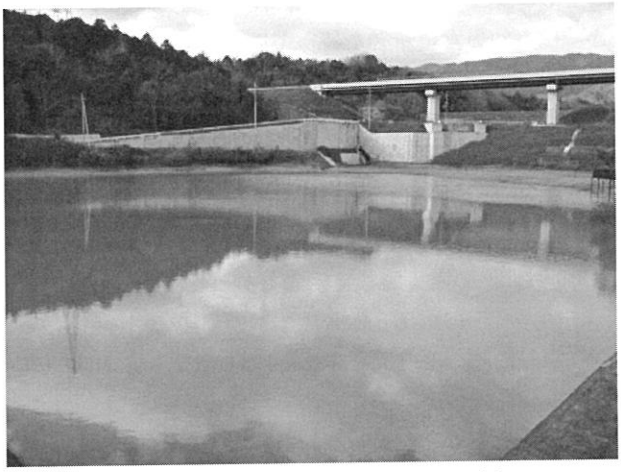
数年前から上池と下池の間に京奈和自動車道の建設が始まり、2006（平成18）年4月27日に開通した。図－７はその工事により、池の周りの石垣や堤防の一部がコンクリート擁壁になった。上池から下池に通ずる導水路についても、石垣積みであったが、京奈和自動車道の建設に伴いコンクリート擁壁に改修された。

建設以前は、石垣積みの箇所が数多く残っており、今後の研究の材料として貴重であったが、非常に残念である。

また、引の池（上池）からの眺望が非常に良く、それを目当てに引の池を訪れる人もいた。しかし、京奈和自動車道の橋脚が池の中央部に建ち、景観を損ねる要因となっている（図－７参照）。

今日では、引の池に訪れる人も減少し、五輪塔や記念碑などは、劣化が激しく、書かれている文字の判別が難しくなってきている。

今後、応其上人の偉大さや当時の人々の苦労、郷土の発展を知るうえで非常に貴重な池であるので、それに見合った整備をしてはどうかと考える。



図－７　引の池下池から上池を見た様子
（撮影：筆者、2007）

４．まとめ

現在の「紀州流」の位置付けは、湖沼の干拓や溜池築堤、用水路開削に用いられた技術であると理解されている。和歌山県内に於いて、応其による溜池の築堤は、「紀州流」が確立していく一端を担っているのではないかと考える。溜池の新築は、近代まで続いた。

また、作業効率を上げるため、応其は各組に分けて築堤作業をしていたこともわかった。この方法により大畑才蔵は、小田井用水の施工期間を短縮した。小田井用水の開削では、第一期工事で20km もの長さがあり、丁場割りを行い、計算により算出した人員を各丁場に配置していた。これは、大畑による特徴と言われていたが、応其の時代から既に行われていたと想定される。

なお、土木事業を施工するに当たり、応其、大畑のみが技術を持っていたわけではなく、奉行や各現場に配置した監督者は、相応の実力者が当たったと考えられる。池や用水路の建設に於ける当時の技術に迫るためには、代表される人物のみを拾い上げるのではなく、細かい人物まで焦点を当てることで「紀州流」の原点を見出すことができるのではないかと考える。

「紀州流」を大成させたのは井沢といわれているが、築堤や樋の技術が紀州流の特徴とするのなら、井沢以前に紀州内で大成していたのではないか。応其の活躍する時代から、「紀州流」の片鱗が垣間見られたのではないだろうか。この辺りについては、さらに追究し明確なものにしたい。

井沢の時代は、吉宗による享保の改革による新田開発が進められ、応其の時代は、秀吉との深い繋がりによる高野山周辺の保護、寺領を与えられ、その場所の新田開発が行われた。いずれの時代も時の為政者と関連して事績が残されている。

引の池の周辺は、官省符荘という特殊な土地形態であった。新田開発をする際に、池の築堤をはじめとする土木技術が発展したものではないかと考えられ、官省符荘についての史料も詳しくみていく必要がある。

西山家古文書と高野口町誌によると、引の池の築造で応其上人と共に活躍した西山勝家は、秀吉が京への路銀として官省符荘へ棟別銭を課した際に、応其上人らと交渉したこと、周辺の村々の境界をめぐる論争を治めた事など、この地域に貢献したことがわかる。

本研究では、引の池にみられる普請について、「引の池と應其上人と應其村との関係」の多くを用いて考察を進めた。応其の普請に関して詳細が書かれているものは、この文献のみであり、今後の課題として、他の文献を探し出し、比較検討する必要がある。

参考文献

1) 斉藤洋一, 近世用水技術史(Ⅲ), 歴史と地理, 367号, 山川出版社, pp. 45-46, 1986
2) 斉藤洋一, 近世用水技術史(Ⅳ), 歴史と地理, 370号, 山川出版社, pp. 44-45, 1986
3) 高野口町誌編さん委員会, 『高野口町誌　上巻』, 高野口町, p. 277, 1968
4) 中村安孝, 『高野山と真言密教の研究』, 名著出版, p. 257, 1976
5) ふるさと橋本市編纂委員会, 『ふるさと橋本市』, 橋本市, p. 158, 1985
6) 北尾清一, 『歴史を歩く-伊都・橋本の郷土史かるた-』, 大和出版社, p. 135, 1987
7) 前掲3), p. 295
8) 前掲5), p. 163
9) 前掲3), p. 277
10) 前掲5), p. 156
11) 生地本清, 『金剛峰寺年譜』, 弘法大師御入定千百五十年御遠忌大法会事務局, p. 117, 1983
12) 前掲3), p. 277
13) 前掲4), p. 253
14) 前掲11), p. 117
15) 前掲3), pp. 284-285
16) 前掲6), p. 135
17) 前掲4), pp. 336-345
18) 岩城鋭夫, 『引の池と應其上人と應其村との関係』, 引の池土地改良区, pp. 24-27, 1991
19) 前掲5), p. 161
20) 前掲3), p. 288
21) 前掲18), pp. 39-42
22) 前掲4), pp. 255-256
23) 佐和隆研, 『密教辞典』, 法蔵館, p. 61, 1975
24) 前掲4), p. 257
25) 前掲3), pp. 278-287
26) 前掲4), pp. 243-273
27) 前掲11), pp. 115-125
28) 前掲4), p. 338
29) 前掲18), pp. 54-56, pp. 68-69
30) 前掲3), p. 278
31) 同前3), pp. 282-283, pp. 760-761
32) 前掲5), pp. 161-162
33) 前掲18), pp. 50-56
34) 橋本市史編さん委員会, 『橋本市史　中巻』, 橋本市, pp. 26-27, 1975
35) 前掲18), p. 69
36) 同前18), pp. 69-70
37) 同前18), p. 70
38) 同前18), p. 71
39) 同前18), pp. 71-72
40) 同前18), p. 72
41) 同前18), pp. 72-73
42) 同前18), pp. 74-75
43) 同前18), p. 76
44) 前掲3), pp. 743-771
45) 同前3), pp. 743-744
46) 西山家古文書（系図）を参考にした
47) 前掲3), pp. 757-758
48) 同前3), pp. 758-759
49) 西山家古文書を参考にした
50) 大畑才蔵編さん委員会, 『大畑才蔵』, 橋本市, p. 67, 1993
51) 前掲51), p. 124
52) 前掲3), pp. 837-838
53) 同前3), p. 838
54) ①～⑤の各池の概要は、3) 高野口町誌 pp. 15-17を参考にまとめた。
55) 前掲3), pp. 765-766